動いた内務省の幹部

K　T　生

○

昔、内務省のお役人であつた後藤文夫氏が、前内閣の農相に爲つたとき、彼の内相秘書官時代を知つてゐる人々は其の榮進の早いのに驚かされたものだつた、夫れに此度は内相として再び内務省のお役人と爲つたのだから、省内のものは勿論のこと地方廳の人々が羨望するのも強ち無理ではない。併し彼の手腕は前内閣の農相として既に相場附けられてゐる、で内相として彼に大きな政治的手腕を振へと要求して見たところで、軍部の尨大な豫算の要求に反對してでも内政進展の爲に戰ふやうな、大きなことを要求する方が無理かも知れぬ、併し内務行政の爲に一つ喜ばなければならぬことは、代々の内相は副總理と言つた格で、思ひ切つた政治的工作を廻らさなかつた。で行政大臣として當然に主張せなければならぬことでも、掩は國務大臣ぢやと言つて活動しない、夫れでは國務大臣として奔走するかと言へば行政大臣ぢやと言つて逃げる。夫れでいつも喧嘩の仲裁役ばかりを勤めてゐたから、内務行政の實は尠しも擧らなかつた。併し此度の内閣では先輩も尠くないので後藤氏は副總理格でもない、で眞の大臣として行動することが出來るから幾分か本筋に戻つた施政が出來るからだ、夫ればかりではない後藤氏は素と事務官であつたから内務行政一般に亘つての智識を具備してゐる、だから保健衛生の何ものであるか位の智識さえも持合せなかつた政治家出身の大臣を戴くよりは内務行政の爲に惠まれてゐる。

初代山縣有朋の内務大臣以來歷代の大臣を調べて見ても、彼れ後藤氏程の年齢で大臣に爲つた者は未だ曾て一人も居ない、だから少壯大臣として世上期待されるところが多いのだが、彼よりも今日まで比較的可い境遇に置かれて

ねた連中が、彼の大臣に爲つたことに燒餅をやいてゐて、色々の非難を流布するのと、政治家の一部が夫れを理由にして區々の言辭を弄するので、後藤氏が大臣に爲つたに就て東京附近では餘り囃し立てられてゐない。併し夫れ等は彼の眞價には何も影響しないことであるから筆者の論題として對象とすることは出來ないが、彼と同期に大學を出た地方長官が隨分多いので、夫等に牽制されて彼が思ふ存分の手腕を振ふことが出來ないのでは無いかと思はしむる。同期生の地方長官は、香坂東京府、齋藤京都府、縣大阪府、白根兵庫縣と千葉新潟縣であつて、一年遲れの連中を數へて見ると隨分尠くない、是等の連中は相當の社會的地位を占めてゐる、夫等が相謀つて內務行政の改革を叫び其の實行を迫つたりしたとき、會々夫れに反對をせねばならぬ場合には妙な場面を見るのでは無いかと思はれる。だから內務行政改革の第一着手として地方長官を整理することが、世上彼に要求する期待に酬ゆるの第一歩であろう。例の官吏身分保障の規定が制定されて以來、官吏の行動は澁滯し切つてゐる、新事件を考按しなければ問題は起らない。他働的な問題に對しては彌縫策を講じておけば夫れで濟む、何も好んで新らしい計畫をする必要はない、と言つた調子の消極的な態度で日を暮してゐる。言はゞ其の日暮しの考で勤務してゐるのだ、で百の官紀振肅の訓令を出して見たところで馬の耳に風だ、青年事務官になれば何年待つても上の椅子は空かない、マー今の內に遊ぶだけ遊ぶことだ、保障令を徹廢して呉れたら働こう、夫れまではゴルフやマーヂヤンに勝敗を決しやう、と言ふ風だ、夫れだから保障令を廢止して手腕を振はなければ馘首するぞと脅かす方が得策だが、いまの內閣としては夫れが出來ない、だから辭職を勸告する手段で整理せなければ官紀を肅正することは不可能だ。彼後藤內相は之を斷行し得るであらうか。

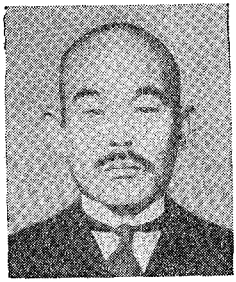
後藤內相

某局長が言つてゐたことには、行政刷新の手段として行

政組織を改革するのも結構だが、行政の眞價を擧げる爲めには組織よりは先づ人の宜敷を得なければならぬ。今の地方長官のやうに責任を回避してゐて地方的な問題でも中央に持ち出して裁斷を仰ぐと言ふ有樣では駄目だ、責任回避の根性があるのは、矢張り政黨內閣の成立を想つてゐる勢だから、是れ迄何れかの政黨に屬したものと睨まれて一度馘首され更に復活した地方長官全部を罷めさすことが適當ぢや、と言つてゐた、筆者も夫れに贊成するに吝でない、賢者の巢窟と言はれた內務省にも、此頃は新計畫の種が切れたと見えて、新事業として發表してゐるものを見ると、四五年前から唱導されたものを唯だ繰返してゐるに止つてゐる。聊か心細い感もするが、强て申譯的な新事業を計畫するの必要もない、地方長官を整理して人心を一新するだけでも、大きな仕事として新內相に責め附けられた新施政であらう。

○

山本前內相の女房役であつた內務次官潮惠之輔氏が退官した、氏の內務次官は二度の勤めであつたのと、彼が內務省生え拔きの官吏であるのとで、各局各課の事務に精通してゐたので、政治家で內務行政の實務に疎かつた山本內相の女房役としては誂向きの人であつた、併かも彼の性格は官僚的氣分を濃度に持つ、卽ち官吏服務規律を其の儘に實行してゐる人であるから、忠勤是れ生命と心得てゐた、で萬事に間違はなかつた、彼の時局匡救土木事業にしても、當初の程は其の成否を疑はれたにも不拘成功裡に結末を告げたのも、彼潮氏に負ふところが尠くない。



潮惠之輔氏

彼は純事務官肌である、從つて政府の最高政策と言ふやうなものには餘り興味も持たなければ考へやうともしない唯だ決定されたところを忠實に執行するにある、內閣が新政を執行するので人心を一新する必要があるから地方長官を更迭せしめやうではないかと言ふことが問題に爲つて、

或る局長が、更迭の標準否な馘首の標準を提出して兎も角政黨臭がある連中には罷めて貰ふと言つたとき、彼潮氏はそんな手荒いことをすると世間が非難すると言つて、マア々々と留男に爲ると言つた調子であつたから革新的氣分を持つ人には餘り歡迎されない、併しその蔭には馘首を免れた人もある譯だから、彼が世上一部の人々に重寶がられる所以である。彼は石橋を槌で叩いて歩く人だから間違は無い代りに、叩いてゐる間に時勢に遲れる憾があつて、省内が聊ともすれば保守的になり易い嫌があつた、今や功成り名遂けて野に下るとき、育てあげた内務省役人が此後どう變つて行くか氣懸りになるであらう、併し何事も時運の趨勢に順應するの外はない。此後省内を監視し指導して貰ひたいものである。

○

潮さんの後を襲つて内務次官になつた丹羽七郎氏、世間は彼を幸運兒視する、成る程、内務省道路課長から岩手埼玉の知事を一二年勤めて直ちに内務省土木局長となつて本省へ戻り社會局長官となつて、今回の榮進を見たのだから或は幸運兒と言ふのかも判らないが、彼れ是迄の效績と手腕人格からして當然の榮進と言つて可い。

氏は誰も知るやうに我路政界の恩人であつて　屢々本誌で紹介された人だから、今更彼の履歴を尋ねて區々の批評を試る必要もない、彼をして今日あらしめたのは自己信念の忠實な實行者であつたことである、人に依つては隨分信念の實行を犧牲に供してまで身の榮進を圖る連中もある、所謂利巧に立廻る人が夫れであるが、彼は會津武士の家に生れた勢で、町人風情的に立廻ることの出來ない人である飽くまでも彼の可い頭から割出されてる信念を抑通す、而かも夫れが將來を見透して判定されたものであるから萬事に無駄と間違はない、之れを斷行するに就ても會津武士の氣質通りに果斷である。後藤内相は聊ともすれば思案に耽ける性の持主だが夫れを斷行せしむるに彼は可い女房役とも言つてよい。彼は至つて口數が尠い同じ言葉を繰返すことをしないで超然たるところがあるから、人或は彼を官僚

の典型のやうに非難する人もあるが、夫れは皮想の見であつて至つて彼は官僚臭を嫌つてゐる、從來から內務省の人事と言ふものは帝大出身者でなければ問題にしなかつたが、彼は之を評して言ふやう、社會の一隅である官界に永年生活してゐて社會の實情に疎い連中が人を觀むとするのであるから觀るの明がない、帝大出身と言ふやうな標準に重きを置くのは人を觀る眼を持たないことを自白してゐる。政治界を始め實業界を眺めると、大學を出なくつても隨分立派な人がゐるではないか、夫れに內務省だけが詰らぬ官僚式保守主義を採つてゐるから、內務行政が進展しないのぢや。と官僚の痛いところを押へて笑つてゐる位だから、評者の言は當らないのである。

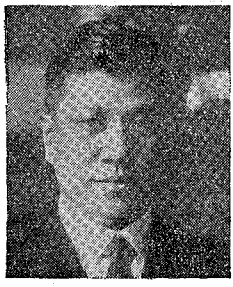
丹羽七郎氏

後藤さんが內相の椅子に就き丹羽さんが內務次官に爲つたと報ぜられたとき、省內は勿論のこと地方廳に一大衝動を與へた、夫れは氏の先輩が隨分澤山ゐるからであつた。丹羽君が次官テ　フフンと燒いた連中も尠くなかつた。夫れ程羨望の的と爲つてゐる、夫れが此後に於ける丹羽次官の行動にどう反映するかゞ問題であり、夫れをいかに措置するかゞ大なる期待を以て見られる、省內の局部長にでも氏の先輩もあれば、次官を以て自任してゐるもある、更に地方長官になれば大先輩格が首を竝べてゐる、大臣直屬のものもあると言つた調子だ、氏の手腕を以てすれば是等の連中を統制することは朝飯前のことであるに違いないが、唯だ夫れは表向きのことで裏へ廻つて岡燒半分に策動する者が無いとは限らない、此邊要心が肝要であらう。夫れに副大臣としての勤めは劇務であつて體の丈夫なことを必要とするが氏は近頃至つて健康人となつたと言ふものゝ從來が蒲柳の性だから、今の健康を保持することが何よりも必要事であろう。夫れに就ては夫人が尠なからず心を痛め健康策を施してゐると言ふことだから其の言に聞いて體を大切にすることが明次官の光榮を捷ち得る要諦であろう。

○

警保局長の松本學氏が退官した。いつも警保局長を退官すると直ぐ上院議員に勅選さるゝのが慣例であつて、氏も缺員十二名の内に加はるものと世上は何人も疑はなかつた、にも不拘遂に漏れたことは頗る遺憾に堪へない。消息通の漏すところに依ると、山本前内相は候補者の一人として閣議に持出したそうだが、内閣の樞機に參劃してゐた某が暗躍して之を否認せしめたと言はれてゐる。成る程、文官任用令を改正して警保局長を特別任用の範圍外に置いたのは警保局長の職に在る者は時の政府と運命を共にするの必要がないとしたのであるから、内閣の更迭に依つて退官するの必要はないにしても、夫れを以て勅選の推擧を否む理由とは爲らない、國家に功勞あれば以て資格がある筈である。

齋藤前内閣は非常時局の措置を擔任する内閣であつた、五、一五事件直後の社會不安を除いて治安を維持　することが大きな役目であつたのであるが、松本氏が警保局長の職に就いて此大きな内閣の一大使命を果たしたことは、隱れない事實である。即ち神兵隊事件を始め埼玉の挺身隊事件或は極左の熱海事件等を未然に防止せしめたことなぞは人の尙耳底に殘つてゐる功績である、尤も前内閣は政黨に拘束されない内閣であつたから政治警察に沒頭する必要は無かつたにしても氏は專ら警察本來の使命を達成するやうに力を注いだ、即ち警察各部の扁制の改善やら刑事警察の擴張充實を圖つて世評を博した、其の功績は以て勅選さるべき十分の資格を持つてゐるのである。夫れにも不拘某の私怨的根性から形式的理由を考へ出して否決したと言ふが如きは、友人に勅選を讓つて退官した某氏の心情と比較して、其の人格に霄壤の差あるを知るであろう、警保局の若手事務官が某の私怨的策動に憤慨し我が警察行政の威信の爲に策動者を彈劾せむと結束したのも強ち無理はない、併し我が



松本學氏

松本氏の前途は洋々たるもので、今假令勅選たる機を逸したにせよ必ずや勅選の椅子は彼を俟つてゐる。

野に下つた彼は文藝協會の一室に頑張つて、文士と共に民衆文藝の作興に力を注いで居ると言はれてゐる　在官當時の對文藝考察を民間文士と相謀つて改善進歩せしむることに一野人松本として活動する想だ、人生は短かくして永いものだ、悠々迫らない態度を以て大なる施政者の研究に沒頭し、來るべき時機を俟つて貰ひたいものだ。

○

土木局長唐澤俊樹氏が、松本氏の後を襲つて警保局長と爲つたとき、局員の何れもが實に線の太い人だつたネーと嘆賞した。氏が昭和七年六月和歌山縣知事から土木局長に轉じて來たとき　局員は辛辣な局長が來たものだと恐怖の念に逐はれたものもあつた位だつたが、併し實際彼に接して見ると顔に不似合な程朗かであるので恐れを爲した連中も自然と彼に近づいて、彼の太つ腹なところに敬服するのであつた、夫れに加へて我國としては空前の農村振興土木事業が起工され、年一億圓以上の仕事が降つて來たのであるから彼を迎へた土木局は、惠比須サンの再來のやうに喜んだ、勿論豫算が成立する迄には大藏省との交渉に隨分惱まされたらしい、夫と言ふのは山本内相が例の調子で、直接藏相とは交渉しない、マー事務の當局で交渉して呉れと局長任せにして其の成行と言ふよりは手腕を見てゐるからである

唐澤俊樹氏

併し彼は永年會計課長として練えた腕を振つて、まんまと成功し、わしが大藏大臣だつたらあれ程大きな豫算は認めなかつた、と山本内相が後日告白した位に大豫算を成立せしめた、夫ればかりではない又其の實行に方つても彼れ一流の嚴格さを以て執行上に誤りなきを期した、どうせ文句を附けなければ納まらない政友會だから、少々の反對や攻擊があつても構はないが、何人が見ても不都合ぢやと言ふことがあつては内務省の不名譽だから注意を要すると局員

を督勵したものだつた、卽ち彼は普通人に一寸見ることの出來ない。上官からの不評や、政黨あたりの不評判は何等意としない、彼等は社會の一階級ではあるが、必ずしも世の大勢を知悉してゐる連中でないと評價してゐるのである、で彼の下で働く者は何れも喜んで其の命に服した。お蔭で內務の土木事業に對しては難癖を附けたい連中をして一口も非難の聲を發せしめ無かつた。彼は其の轉任に方つて僕の時代は惠まれてゐたが是からは財布の紐を絞る時代に爲つてゐるから後に來る人は氣の毒だ、と挨拶して、其の功績を時代の勢にしてしまつてゐるが、彼の奔走活動は我が土木史に特筆大書すべきもの〻一つである

歷代の局長が手を附けむとして躊躇した土木技術官の大整理も、彼の手に依つて見事に片附けられた、山本內相は一時に勅任官を五人も六人も馘首することは盲斷だと、最初は容易に贊成しなかつた想だが、沈滯してゐる技術官界の空氣を革正するのは此時ばかりであると熱心に口說いた結果、夫れでは君に任すと言ふことに爲つて、這般の大異動を見たのである。隨分各方面からの注文もあれば威壓にもあつたらしいが、嚴然として夫等を排して所信を斷行した、勿論彼は餘り技術官に知己はないので人を知らない、そこで彼は地方に出張して技術官に會見し、竊に首を實驗し一面世評に聞いて人を評價してゐたのであるから大體に於て誤がなかつた。某地位に就くべく選定された二人の候補者を比較して言ふやう、一人は世評極めて良い何人も非難する者はないが、他の一人は或る方面から非難攻擊する向もある、併しながら男として世に立つ以上は所信がなければならぬ、所信があればそこに敵もあるのが當然で、何人も非難しない人間は所信の持合せのないことを現はしてゐるから其の者は採らなかつたと、此の論法で人を見てゐるのは唐澤氏個性の一端を窺ひ知ることが出來る。兎も角積年の難問題を解決して土木技術官界に新空氣を注入した其の功績を沒することは出來ないであろう。

彼は長野縣人であるだけに同縣人の特性複雜性を濃度に持つ、併し縣人性の善惡を知悉せる彼は其の缺點を矯正し

て美點の持主たらむことを心得てゐるので純然たる長野縣人とは思はれない、燃ゆるやうな情熱から割出された彼の行動は人の意表に出するものが頗る多い、戀に破れて米國で勞働したのは彼の若い時代の一戯であつたであろうが、今も尙熱情の迸るところ何をやるか判らない、其の熱は友人のため後進者の爲め將た世の弱者の爲めに注がれて幾多の逸話を藏してゐるが、今は言はない、警保局長と爲つても矢張り男性的に振まく熱情は更に上るであろうが、土木局長とは違つて世上許されないものがあるか判らない、彼の友人等が夫れを心配してゐるのも無理はないが、彼としては男兒の意氣の爲には警保局長位の地位は何時でも擲つ慨はある。

彼が言ふところに依ればドーセ百姓の子だ、上品なことを言つて日を暮し得ても、夫れは欺瞞生活だ何事も赤裸々な生活をして實際の社會人として活動せなければ人間ではない、俺は官吏をしてゐても夫れを心得て居る積りだ、と實際彼は多趣味の人であつて何でもやる、從つて有ゆる階級人と交渉してゐる、官僚の本家伊澤直系のやうに言はれてゐても、伊澤宗を鵜呑にするやうな男ではない、伊澤氏の識見は現在急進派の畫策するところよりは一層に徹底したものがあるやうだが、言ふところ國家を想ふ一點に在るのだから、意見も聞き聞かされもするのであると言つてゐる、併し彼も國家社會主義を謳歌する一人であることは、日常の言葉に表はれてゐたが、警保局長となつても矢張り其の主義を謳歌するであろうか、見物である。彼にとつての警保局は土木局とは違つて大正十一年以來關係し來つた局である、夫れだけに彼の抱負を實現せしむる餘地がある、何を畫策するかは此後に徵することゝする。

○

唐澤氏の後を襲つて埼玉縣知事から轉じて來た廣瀬久忠氏、當然の榮轉と言ふべきである、蓋し前に土木局長に爲るべく噂されたが夫れが今日實現したまでのことであるからである。氏は明治二十二年山梨の生れ、大正三年東大政治科の出身で、學窓を出ると直ぐ內務系の役人と爲つて岐

阜縣警視を振り出しに今日の地位を得るに至つた。氏は滋賀と福井に各一年ばかり勤めたゞけで多くは東京生活をして惠まれてゐるが、大正十四年に彼の關東大震火災の復興事業を主管した、復興局書記官として而かも總取締役たる文書課長の任に就いてから、其の名聲頓に帝都に喧傳さるゝに至つて其の前途を囑目されたのであつたが、前長官だつた堀切善次郎が東京市長と爲るに及んで彼を助役に懇望したので彼は友人同僚に引き留められるゝにも不拘、前途ある官界を捨て東京市に這入つた、そこに彼の義俠的氣分を見出すことが出來得るであらう。

廣瀨久忠氏

東京市在任は一年餘りで永くなかつたが、兎も角八百屋や女郎屋の主人公を相手に市政を執行せなければならぬので官吏氣分とは隨分違ふ所があつた筈だが、夫れを甘く切拔けて堀切市長を助けたものだつた。彼の述懷として傳へられてゐる所に依ると、俺は隨分氣儘な男だが東京市生活をしてから骨が柔く爲つたと、言つてゐるが、三重縣知事時代に民政黨の反對を受けながらも三重縣の南部開發の爲に矢ノ子峠の改修を斷行して省營自動車の運轉を策するやら、鳥羽港の修築に奔走したことに徵するときは、餘り骨が柔く爲つた譯ではあるまい。此氣骨こそは此後の土木行政の上に表はれることであろう。

華やかに大土木事業を執行した時代とは違つて、縮少氣分に向つた時に土木局長に拔擢されたのは、確に貧乏籤であるに違ひない、併しながら農村現時の狀勢からすれば手廣くやつた事業を今俄に縮少して夫れで世間が納まるものとは考へられない、そこに何等かの對策を必要とし前局長時代のものに代るべき新事業が生れるであろうから　必しも悲觀するの要はない。此後の土木行政は失業救濟ちやとか或は匡救事業とか言はないで產業立國の國是に則つた事業本位に立脚して策すべき多くのものが殘されてゐる。殊に豫算ばかりが土木行政の本體ではないので、殖產興業の

爲に一定の政策を樹立することも我が土木行政に與へられた大きな仕事であつて、道路法の改正を始め治水法の制定乃至は港灣法の制定と隨分大きな問題が殘されてゐる。何れ是等は例の土木會議に於て調査審議さるべきものであるが、新局長の手に依つて解決さるべき運命を持つものである、我が土木行政の爲に一と肌ぬいで貰ひたいものである。

○

局長の更迭に伴つて土木局課長にも異動があつた。河川課長の松村光麿氏が官房都市計畫課長に榮轉し、道路課長であつた武井群嗣氏が其の後を襲ひ、道路課勤務の事務官であつた新居善太郎氏が道路課長と爲つた。

松村氏は永年河川課長として手腕を振つた、卽ち社會が要求した中小河川の改良に力を入れて遂に其の一部を實行した、行く先都市計畫は河川のやうな原始的な自然公物を對象とするのではなく文化の中心都市萬般の施設を對象とするので、社會狀勢の變轉に從つて策すべき多くのものがある、彼は又之に對して河川行政に於けると同じやうに新味を見せるであらう。

武井氏は、路政界の權威として活動した人、今更河川課長に送るのには我が路政の爲に惜むのであるが、道路行政と言ひ河川行政と言つても畢竟土木行政の分派に過きないので、全然他局課に轉じたのとは違つて、時に路政の爲に指導援助して貰ふことの出來る因緣もあるから、夫れを賴りに諦める外はない。河川行政にも多くの改革すべき事案があつて、利水政策の確立やら河川法の統一乃至は改正事業が、土木行政に精通した氏の手腕を待つてゐる筈、聊ともすれば事業本位に立脚して河川行政を亂さむとする關係者を抑制して新水法の制定にまで進んで貰へば、路政界を飛出されたことに就ての吾々の不平を醫するであろう。

新居氏は道路課勤務の事務官であつたが前內閣に於ける齋藤首相の祕書官として二年餘ばかり椅子をあけてゐた人唯だ夫れが元へ戻つて課長に爲つたと言ふだけであるが我が路政は日進月步の勢で變轉してゐて此後爲すべき多くの事案を包藏してゐる。武井氏の例にならつて奮鬪を祈る。